バッハの器楽 ― 室内楽と管弦楽曲

酒巻 和子（昭和音楽大学教授）

はじめに

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685-1750）は、多くの音楽家を輩出してきたバッハ一族のひとりとして、ルターゆかりの地のひとつ、中部ドイツのアイゼナハに生まれました。当時のドイツは宗教改革の混乱がようやく収まり、領邦君主たちの宮廷や各地の教会で音楽文化が花開こうとしていました。西洋音楽史で一般にバロック時代とは1600年から1750年までの150年間を指します。この時代の始まる頃、イタリアで新しい声楽様式であるオペラが誕生し、ヨーロッパ各地に広まりました。ヴァイオリンを中心とする器楽も同じくイタリアを中心に発展していきました。バッハはバロック時代の後期に位置し、ドイツの伝統とともにイタリアやフランス音楽の影響を吸収しながら音楽活動を続けました。その生涯を終えた年が時代の終わりに重なります。バッハを象徴する作品といえば教会音楽がまず思い浮かぶかもしれませんが、バッハの作品には協奏曲や室内楽など魅力的な器楽曲も多く、それらはバッハが転職をくりかえし、そのつど職務を誠実に果たしたことと結びついています。

幼少期

バッハの父ヨハン・アンブロジウス・バッハ（1645-1695）はアイゼナハの宮廷楽団に所属する音楽家で、幼少期のバッハにヴァイオリンの基礎を教えたと推測されています。7歳の頃にラテン語学校に入学したバッハは地元の教会で素晴らしいボーイ・ソプラノで歌っていたともいわれています。しかし1694年に母が、翌年に父が亡くなり、バッハは長兄ヨハン・クリストフ・バッハ（1671-1721）に引き取られることになりました。パッヘルベル（1653-1706）に学んだ兄は、アイゼナハの南東にある小さな町オールドルフで教会オルガニストを務めていたのです。

オールドルフからリューネブルクへ

10歳から15歳までバッハは兄のもとで暮らし、鍵盤楽器の手ほどきを受けました。作曲については、兄の楽譜を写譜することによって自ら勤勉に学んだと伝えられています。その後1700年に給費生として北ドイツのリューネブルクにある聖ミヒャエリス教会付属学校に移り、そこでも美声を生かして聖歌隊で歌い、変声期を迎えてからは器楽奏者としても活動しました。北ドイツ・オルガン楽派のひとり、聖ヨハネス教会のベーム(1661-1733)のもとでオルガンを学び、初期の作品も残しています。

教会オルガニスト時代（アルンシュタットとミュールハウゼン）

こうして成長したバッハは、再び中部ドイツに戻り、1703年3月に一時的にワイマール宮廷でヴァイオリン奏者を務めた後、同年8月、18歳の若さで、歴史ある都市アルンシュタットで新教会のオルガニストの職を獲得しました。1705年には、名高いブクステフーデ（1637-1707）のオルガン演奏を聴くために長期の休暇をとってリューベックまで旅をしています。プロテスタント教会で重要なコラールのオルガン編曲も学び、その才能は次第に知られるようになって、1707年にはミュールハウゼンの聖プラージウス教会のオルガニストに採用されました。当地では《トッカータとフーガ ニ短調》などのオルガン曲のほか、最初期の教会カンタータ数曲も作曲されています。同年10月、22歳の時にマリア・バルバラ・バッハと結婚しました。

ケーテン時代

1716年12月にワイマール宮廷の楽長（カペルマイスター）ドレーゼが亡くなり、後継者には翌年、その息子が任命されました。1717年に32歳のバッハを宮廷楽長として迎えたのが、アンハルト＝ケーテン公レオポルト(1694-1728：在位1704-1728)でした。ケーテンはワイマールの北東約100キロに位置するドイツ東部の小さな地方都市です。バッハよりほぼ10歳若いレオポルト公は音楽を大いに愛しており、バスの声で歌い、ヴァイオリン、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロを演奏することができました。父を早く亡くしましたが、当時の貴族の子弟の慣習としてグランドツアーを経験し、ヴェネツィアやローマ、ウィーンなどを訪れてもいます。バッハが言うように「音楽を愛するだけでなく、理解していた」のです。宮廷楽団も充実させようとしていました。レオポルト公が新しい楽長を高く評価していたことは、宮廷で2番目に高かったというバッハの俸給からも明らかでした。同じプロテスタントでもレオポルトとその家族はカルヴァン派であったため、バッハは、ケーテンでは誕生日や新年のためのいくつかの世俗カンタータのほか、協奏曲、室内楽といった器楽曲を主として作曲しました。《無伴奏ヴァイオリン曲集》、《インヴェンションとシンフォニア》、《フランス組曲》、《平均律クラヴィア曲集　第1巻》など代表的な器楽曲の多くのほか、《ブランデンブルク協奏曲》もこの時代に生み出されたものです。実り多く幸福な時代でしたが、バッハは1720年に妻を亡くし、翌年宮廷ソプラノ歌手アンナ・マグダレーナ・ヴィルケと再婚しました。

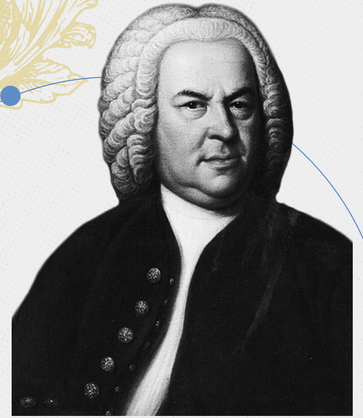
アンハルト＝ケーテン公レオポルト

バッハ研究と楽譜について

バッハの作品は、生前に出版されることはごく例外的にしかありませんでした。没後100年にあたる1850年に設立された「バッハ協会」が企画した『バッハ全集』（旧全集。Leipzig,Breitkopf & Härtel, 1851-1899）は、作曲年順ではなく体系的に作品を整理し、原典版楽譜全集として集大成した労作でした。さらに、没後200年にあたる1950年に、ドイツの音楽学者シュミーダーによる『バッハ作品目録 Bach-Werke-Verzeichnis』すなわちBWVが公表されました（第2版1990年、第3版2022年）。そして『新バッハ全集』（新全集。Kassel, Bärenreiter,1954-2007）が詳細な校訂報告とともに刊行され、現在もバッハ研究の重要なよりどころとなっています。

–主な日本語参考文献–
角倉一朗監修「バッハ事典」（音楽之友社、1993年）
礒山雅、小林義武、鳴海史生編集『バッハ事典』（東京書籍、1996年）
クリストフ・ヴォルフ「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ」角倉一朗訳
『ニューグローヴ世界音楽大事典』（講談社、1997年、第13巻）

1685	1707	1710	1711	1713	1714	1717	1720	1721	1723	1725	1735	1740	1742	1750
3月21日、アイゼナハに生まれる。	ミュールハウゼンのプラージウス教会オルガニスト。マリア・バルバラ・バッハと結婚。	長男ヴィルヘルム・フリーデマン誕生。	ヴィヴァルディ、合奏協奏曲集《調和の霊感 Op.3》をアムステルダムにて出版。 ヘンデル、ロンドンにてオペラ《リナルド》初演。	F.クープラン、《クラヴサン曲集　第1巻》をパリにて出版。 以降、1717年第2巻、1722年第3巻、1728年第4巻。	ワイマル公ヴィルヘルム・エルンストの宮廷楽団楽師長。カール・フィーリップ・エマヌエル（通称「ベルリンのバッハ」「ハンブルクのバッハ」）誕生。	アンハルト＝ケーテン公レオポルトの宮廷楽長。	妻マリア・バルバラ没。	宮廷歌手アンナ・マグダレーナ・ヴィルケと結婚。	ライプツィヒ聖トーマス教会カントル。	ヴィヴァルディ、協奏曲集《和声と創意の試み Op.8》（「四季」を含む）をアムステルダムにて出版。	ヨハン・クリスティアン・バッハ（通称「ミラノのバッハ」）誕生。	カール・フィーリップ・エマヌエル、プロイセンのフリードリヒ大王の宮廷チェンバロ奏者。	ヘンデル、ダブリンにてオラトリオ《メサイア》初演。	7月28死去。享年65歳。



ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ

ワイマール時代

1708年6月、バッハはザクセン＝ワイマール公ヴィルヘルム・アウグストの宮廷礼拝堂オルガニスト兼宮廷楽師として採用されました。オルガンの若き巨匠として名声を高め、1714年には楽師長（コンツェルトマイスター）に昇格し、ひと月に1曲の教会カンタータを作曲することが義務になりました。当時ユトレヒトの大学に留学していたヴィルヘルム公の甥ヨハン・エルンストが1713年に帰国したとき、大量の楽譜を持ち帰りました。その中には、アムステルダムで出版されたヴィヴァルディ（1678-1741）の協奏曲集なども含まれていたのです。これらイタリア様式の器楽作品はバッハに大きな影響を与え、原曲を学ぶとともにオルガンやチェンバロのための編曲作品が数多く生まれました。ヴィエルム・フリーデマン（1710-1784）とカール・フィーリップ・エマヌエル（1714-1788）という、将来音楽家として活躍する2人の息子が誕生したのもワイマール時代でした。

ライプツィヒ時代

1723年、38歳で就任してから亡くなるまでバッハがその地位にあった「トーマスカントル」は、ルター派の聖地ライプツィヒにおける「聖トーマス教会カントルならびにライプツィヒ市音楽監督」でした。具体的には市内4つの主要な教会の音楽のほか、トーマス教会付属学校および市の管轄する音楽生活全般に対しても責任をもつものです。前任のクーナウ（1660-1722）が亡くなり、ライプツィヒ市参事会は、後任として複数の候補者の中から最終的にバッハを選びました。きわめて多忙な中で、就任直後から毎日曜日と教会祝日の主礼拝のための教会カンタータが大量に作曲されました。いずれも歌詞の内容を音楽で表現する修辞学的手法が駆使されています。大規模な《ヨハネ受難曲》と《マタイ受難曲》もこの時期の作品です。1730年代には、大学生を中心とした市民の演奏団体「コレギウム・ムジクム」を指導し、コーヒー店で定期的に演奏会を催すことにも力を注ぎました。《コーヒー・カンタータ》として親しまれている作品は、この頃に作曲されたものです。一方で周辺の宮廷および宮廷音楽家とも交流をもちました。《ロ短調ミサ曲》は、バッハがミサ通常文全体を通して作曲に取り組み、最晩年の1749年頃に成立した唯一のミサ曲ですが、1733年にはそのキリエとグロリアをドレスデンのザクセン選帝侯アウグスト2世に献呈しています。また1740年には次男のカール・フィーリップ・エマヌエル・バッハがプロイセンのフリードリヒ大王（フリードリヒ2世）の宮廷チェンバロ奏者として雇用されました。バッハ自身、1747年にポツダム宮殿を訪れた際に即興演奏のために大王から与えられた主題をもとに後日《音楽の捧げもの》を作曲して大王に献呈しています。この作品は《フーガの技法》と並んで厳格な対位法の技法を追求したもので、晩年まで衰えないバッハの創作意欲を明らかに示すものです。

聖トーマス教会

JOHANN SEBASTIAN BACH